



# ひるの星

No. 266

## もくじ

バハオラの言葉.....	2
分かち合い.....	8
クイズ .....	8
気前のいい うさぎ作り.....	9
ぬり絵.....	10
みんなの写真.....	11
保護者のページ.....	12



はんえい  
"繁栄の中にあって

は

かんだい

寛大であれ、

ぎやつきょう

逆境に際しては

かんしゃ

感謝する

ものであれ"

バハオラ



## わかちあい



学校が春休みの沖縄の子どもの話です。家の外でサッカーをして遊んでいた4人のきょうだい、家に帰って来ました。ちょうどそこに、末っ子のアニサがポテトチップスのいっぱい入った袋を抱いて口をもぐもぐさせながら帰って来ました。それを見たシャラが、「それ、私にもちょうだい！」とせがむと、続いてリアズが「おれにもくれよ！それ、だれにもらったんだ！」と叫び、4人がアニサのまわりに次々と集まってきました。その輪をはねかえすように、「だめよ！私のだから！みんながサッカーしてるのを、となりのチヒロちゃんと観ていたら、チヒロちゃんのお母さんが私にくれたんだもん。」とアニサが言い返しました。4人は口々に、「みんなにも分けるよ！」「おねがい！」「おれたち、お腹が空いているんだから！」「アニサ！」と口々に叫びながらお母さんのいる台所の方に逃げて行くアニサのあとを追いました。お母さんがその様子を見て笑いながら言いました。「おやおや、5人のお腹を空かしたすずめたちがチュンチュン鳴きながら、やって来るわ！」

「お母さん、みんなに分けるようにアニサに言ってよ！」リアズがもどかしそうに言いました。「むりやり分けるようにさせたら、それは取り上げることになるでしょ。」とお母さんがなだめて、「そうしたら、自分がないからといって他の人のものを取り上げてもいいことになるじゃないの。」「だけど、ロビンフッドは金持ちから取り上げて貧しい人たちに恵んでいるじゃないか！お母さんもロビンフッドになって、かわいそうなおれたちに恵んでくれてもいいじゃないか！」アスマがニヤリとして言いました。するとモナが真剣な顔をしてみんなに言いました。「バハオラが、神様を信じる人だったら、……、

飢えで死にそうであっても、隣人の所有物に手を伸ばして、不法にそれを奪うことを拒否するであろう。たとえ、どれほどその隣人が卑しい、価値のない人間であっても。と言われているのよ。」さらに付け加えて、「でも、アニサは分かち合うことを学ばなくてはいけないと思うわ。」とアニサに向かって言い、「まだ他にもあるのよ。繁栄にあっては寛大であれ、逆境にあっても感謝せよ。。。。。ってね。『たくさんあるときは気前よくしなさい、そして困ったときでも感謝することを忘れないように。』』とされているのよ。アニサはたくさんあるんだから、気前よくしなくちゃ。」みんな賛成してうなずきました。そこでお母さんが、「どうして私たちは分かち合うことを学ばなくてはいけないのかしら？」と聞きました。みんな互いに顔を見合わせてから、お母さんの方を見ました。お母さんが説明し始めました。

「神様は宇宙のすべてを私たちに分け与えられているのよ。私たちがそれで成長できるように、そして、学ぶことができるようにね……。ちょうど学校のようなね。神様は私たちが創って一人一人に生命を吹き込まれ、とても私たちを愛されているの。私たちが誰かを愛する以上に、私たちを何よりも愛されていて、しかも誰かれの分けへだてなく同じように愛していっしょやるの。お母さんも、あんたたちを同じように愛しているのよ。だから、あん



わたちの誰かが傷ついて苦しんだら、それが誰であってもお母さんは悲しいわ。特にきょうだいで傷つけ合ったらね。世界中のどの子でもお腹を空かして苦しんでいたら、神様はどんなに悲しまれることかしら。だから、みんなが満足して幸せを感じるようにしなければいけないのよ。分かった？たとえ相手がまったく知らない子でもね。みんな神様の子どもなんだから。」

「お母さん、神様がどう思って、どう感じているのか、どうやって分かるのよ？」

理屈っぽいモナが不思議そうに聞きました。

「いい質問ね。それは神の顕示者を通して分かるのよ。神様は私たちを愛しているから私たちが創られたということも、私たちが互いに助け合うように、そして神様のことを知るように望まれているってこともね。」さらにアスマが付け加えました。

「そう言えばアブドル・バハの言葉に、**人間の本质は霊的存在であり、人間は霊的に生きる**とき、**本当に幸せになるのです**とあるのを、俺たちはバハイの子どもクラスで暗記したよ。人間はもともと精神的な生き物だから、精神的に生きるべきだという意味だったと思う。」 「その通りよ、アスマ。」とお母さんが言って、「さっき説明したように、この世にあるものはすべて神様の恵みによるのよ。私たちのものは何もないの。すべては、神様から借りているだけなのよ。この世にいるとき身に付ける美德だけが私たちのものになるんだって。その美德だけが次の世に持っていけるといわけ。」

「なるほど、分かったよ。お母さん。」とリアズが続けました。

「分かち合いはフィーストなんかでもやっているよ。誰かがお皿にのったお菓子をまわしてきたら、ひとり占めにするんじゃなくて、ひとつだけもらって次の人にまわしているとか。それと同じだろう？」「とってもいいたとえね、リアズ。」とお母さんがほめました。「そうなのよ。私たちの手にあるものは神様の子どもみんなと分かち合うようになっているのよ。」「でも、やっぱり分かち合うのはむずかしい！」とつぶやきながら、アニサはポテトチップスの袋を抱いて離そうとしません。「全部、食べたいんだもん。」「分かち合えるようになるには、まだいくつか他の美德が必要なようね。どんな美德があったらいいかしら？」とお母さんが聞きました。みんなだまって少し考えました。

「愛が必要！」とモナが真っ先に答えました。「そうね、相手を愛していなければ、分かち合うのはむずかしいわね。」「相手の気持ちを考える、同情！」とアスマが続いて言いました。「許し。」とリアズが続けて、「アニサ、おれが前に意地悪したのは許して、そのチップスをくれるというのはどうだい？」と言ってニヤリとしました。今度はシャラが、「信用が必要！」と言って、「自分と相手との間に、お互いに分かち合うという信用がなければ、自分だけが分け与えるというのはむずかしいよね。」

「しかし、相手からのお返しがなくとも、神様を信用していれば、神様が必ずその代わりのお返しというか、その報いをしてくださるよ。神様は分け与えるのが得意だもんね。」



アスマが上手い説明をしました。

「みんな、素晴らしい！」とお母さんがほめて、「たしかに、美德をたくさん身に付けるほど分かち合うのが易しくなるみたいね。そうすれば、もっと精神的になって神様により近くなるし、もっと喜びを感じるようになるわね。」するとシヤラ

が言いました。

「あっ、思い出した。バハイ子どもクラスでも

**施与と寛大とはわが属性である** というバハオラの言葉を習ったわ。

たしか、神様が得意なのはアスマが言ったように与えることと気前のよさで、それを身に付ける人は恵みをもらおうというのだったと思う。」

アニサはポテトチップスの袋を名残惜しそうに見つめました。モナがアニサを励ますように言いました。「気前よく分かち合えば、ものを欲しがるのが少なくなるわね。お店なんかで欲しいものを見つけて、それが自分のものにならなくても、誰かがそれで楽しめると思うわ。」

「わあー、すごい、モナ。考えが深いなあー。そんなことできるのか？」とアスマが感心して聞きました。

「私ができると言っていないわ。私が言いたかったのは、もし私たちがもっと気前よく分かち合えば、そういう考えが浮かぶと言っているのよ。」とモナが答えました。

「わかったよ。」とアニサがため息をついて言いました。「チップスをみんなにあげればいいんでしょ！その美德が身に付いて精神的になるというんだったら...」と言いながらチップスの袋の口を開けてみんなに差し出しました。

「サンキュウ！アニサ！」子どもたちはそう叫ぶと、喜んでその気前よさを受け容れました。しばらくしてお母さんが健康的なおやつをふるまいました。午後になれば子どもたちがお腹を空かさだろうと用意していたのでした。子どもたちがうれしそうに食べているとき、お母さんが質問をしました。「ねえ、アブドル・バハがどんなに気前よかったかという話を、誰か知っている？」

リアズが答えました。「おれ、知っているよ。アブドル・バハが、はいていたズボンにホームレスの男にあげた話なら。」

「それなら、おれも聞いたことがあるよ。」とアスマが言いました。

「たしかヨーロッパのどこかだったよ。アブドル・バハが、お泊りしたところのお庭を歩いていたとき、ホームレスの男が近くにいたんだ。身なりはボロボロだったんだ。」



リアズが続けて、「アブドル・バハは急いで茂みの中に隠れてズボンを脱いだんだ。そして足も隠れるくらい長い上着のローブを着て出てきて、ズボンをその男にあげたんだ。」アスマが「それからアブドル・バハは、そこのお家に入って行ったんだ。きっと、他のズボンをさがしに行ったんだろう。」としめくくると、シャラが感心して、「すごい、そんなこと考えられる？見たこともない人にいきなり自分の着ているものを脱いで、あげるなんて。」するとモナが言いました。

「もうひとつ、ふつうの人には考えられないような、アブドル・バハのお話があるわ。アブドル・バハとその家族が夕食を食べ始めようとしたところへ誰かがやって来て、近所にその日の夕食に食べるものが何もない家族があるとアブドル・バハに告げました。」

「その話、聞いたことがあるわ。」とシャラが言いました。「それを耳にしたアブドル・バハは自分たちが食べていた夕食をかき集めて、『私たちには明日食べるものもある。だが、近所にそれさえない家族がある。』と言って、その夕食を全部あげてしまわれました。」とモナが続けました。これを聞いて、アニサは「気前よくするのは大変だー！」と頭をかかえてしまいました。「誰でも大変なんだよ！アニサ！」と言って、リアズが笑いました。

「アニサ、幼いのにそれがよく分かったようね。」アニサの頭をなでながらモナがほめました。シャラが跳びはねて、「私にいい考えがあるわ！私ね、ぬいぐるみのうさぎさんの作り方を習ったの。赤ちゃんのくつ下で作るのよ。アニサの気前よさに感謝して、その作り方を教えてあげるわ！」「わあー！ありがとう！シャラ。」するとモナが、

「アニサの気前よさのおかげで、いろいろ美德を習ったから、その美德をそれぞれ紙切れに書き込んで、うさぎさんのお腹に詰め込むのはどうかしら？いろいろな美德を抱えた気前のいいうさぎさんになるわ！」と提案しました。

「それはいい考えね。」とお母さんが言って、「ちょうどいいことにアニサが赤ちゃんのときのくつ下がまだあるのよ。」するとリアズが言いました、「おれが、その美德を書いてやるよ。付せんを使ったらどうかな？とって来てやろうか？」モナも「私、ぬいぐるみに詰める綿をとってくるわ。」と言い、みんなで材料集めに散らばって行きました。しばらくすると皆が材料を持って台所のテーブルに戻って来ました。

「アニサ、何て書こうか？怒り？生意気？意地悪？」とリアズがふざけて言いました。「だめよ、そんなんじゃ！うさぎさんは愛いっぱい、親切とか思いやりとか、いいことづくめにしなくちゃ！」とアニサが怒ったように言いました。アスマとリアズは笑いながら付せんに美德を書き始めました。「おれは、愛、信用、許しを





書いたぞ。」とリアズが言うと、「おれは、<sup>どうじょう しんせつ</sup>同情、親切、それから一番<sup>いちばん</sup>むずかしい<sup>きまへ</sup>気前のよさ」とアスマが言いました。アニサが<sup>まほう</sup>魔法じみたうさぎになるようにと、きらきら<sup>かがや</sup>輝く<sup>きんぷん</sup>金粉をちりばめました。それからみんなで<sup>わた</sup>綿と<sup>いっしょ</sup>一緒に付せんをくつ下に<sup>した</sup>詰め込んでいきました。最後に<sup>さいご</sup>女の子<sup>おんな</sup>三人が<sup>こ</sup>準備した目、鼻、口、しっぽをのり<sup>のり</sup>付けしてうさぎの<sup>かたち</sup>形ができ<sup>あ</sup>上がると、「美德のうさぎのでき上がり！」とモナが大声で発表しました。「わあー、すてき！」とお母さんが<sup>かんげき</sup>感激して、

「みんなの<sup>きょうりょく</sup>協力のおかげですばらしいものができたわね！」

「ニックネームは『<sup>きまへ</sup>気前のいいバニー』にしよう！」とリアズが言いました。みんな<sup>さんせい</sup>賛成して<sup>はくしゅ</sup>拍手しました。

そのとき、お父さんが帰って来たので、<sup>さつそく</sup>早速、アニサは<sup>しょうかい</sup>気前のいいバニーを紹介しました。「<sup>おこ</sup>気前のいいバニーちゃんは怒らない、<sup>なまいき</sup>生意気にならない、<sup>いじわる</sup>意地悪しない... <sup>しんせつ</sup>親切で、<sup>しんよう</sup>信用できて、<sup>どうじょう</sup>同情するし、<sup>ゆる</sup>許すし、みんなに<sup>あい</sup>気前よく愛をいっぱいあげる、<sup>なまえ</sup>名前の通り<sup>とお</sup>気前の

いいうさぎさんなのよ。」「すばらしいバニーじゃないか。アブドル・バハに<sup>みなら</sup>見習っていて、みんなに<sup>あい</sup>愛されるだろうね。」お父さんがにっこりして言いました。というわけで、<sup>おこ</sup>気前のいいバニーは子どもたちのお気に入りのマスコットとなって<sup>こ</sup>子ども<sup>べや</sup>部屋にかざ<sup>かざ</sup>飾られました。そして、<sup>きやく</sup>お客さんが<sup>おとず</sup>訪れるたびにアニサはこのマスコットを<sup>しょうかい</sup>紹介しました。

「<sup>きまへ</sup>気前のいいバニーちゃんは怒らない、<sup>なまいき</sup>生意気にならない、<sup>いじわる</sup>意地悪なんかもしないで...<sup>だれ</sup>誰にでも<sup>あい</sup>気前よく愛をいっぱいあげるから、みんなから愛される、愛を分かち合うのが得意なうさぎさんだよ。」



## クイズ

1. お話の始めに、四人の子どもは何をしていましたか？  
\_\_\_\_\_
2. 他の子たちはアニサが持っていた何を欲しがりましたか？  
\_\_\_\_\_
3. たくさんあるのに分けてくれないからと言って、人のものを取りあげてもいいですか？  
それはなぜ？ \_\_\_\_\_
4. 分かち合えるようになるには、どんな美德が必要でしょうか？  
\_\_\_\_\_
5. アニサは持っていたポテトチップスを分けることができましたか？  
\_\_\_\_\_
6. アブドル・バハは、はいていたズボンを誰にあげましたか？  
\_\_\_\_\_
7. アブドル・バハとその家族が夕食をあげてしまったのは何故でしょうか？  
\_\_\_\_\_
8. お話の中で子どもたちは何を作ろうとしたのでしょうか？  
\_\_\_\_\_
9. うさぎさんには綿のほかに何が詰められましたか？  
\_\_\_\_\_
10. 今、自分に必要と思う美德は何ですか？  
\_\_\_\_\_

いくつ答えられましたか？

答は保護者のページにあります。







## きまへ げん いうさぎ づくりに

### ざいりよう

#### 材料:

\*あかちゃん しようくつ した

\*しろあかのモール

\*わた綿

\*ピンクと白のフェルト (はな、くち、みみと、しっぽ用)

\*のり、はさみ

\*ぬいぐるみ用の動く目玉

\*ふせん (美德を書き込む紙切れ) または小さい紙切れ

\*きらきら輝く金粉

### つくかた

\*四、五枚の付せんにそれぞれ異なる美德を書き込む。金粉をちりばめてもよい。

\*くつ下に綿と美德の付せんに少しづつ詰め込む。

\*くつ下の真ん中を赤のモールで巻いて胴体と頭に分ける。

\*頭の半分まで綿を詰めて白のモールでしぼる。

\*しばったところから残りを、はさみで二つに切って耳にする。

\*ピンクのフェルトを目、鼻、口にして、耳にも、のり付けする。

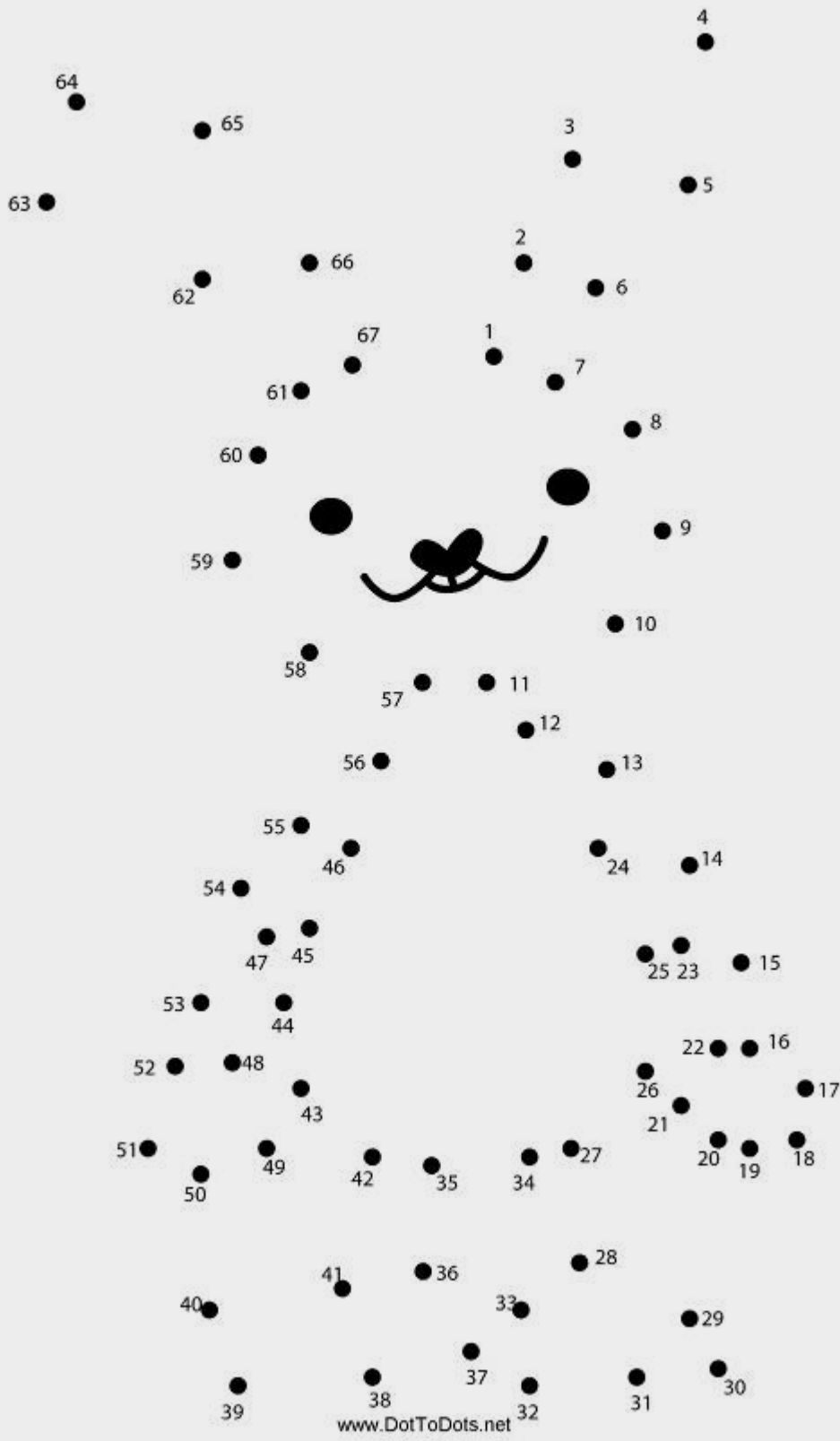
\*綿または白のフェルトをしっぽにして、のり付けする。

きまへのいいバニーのでき上がり!!

バニーちゃんに美德を身に付けるのをわすれないように!



てん むす なに み え で いろ  
点を順に結んでいくと、何が見える？絵が出てきたら、色をぬりましょ。











## 保護者のページ

次の引用文を参考にして、お子様と一緒にご家族で「施与」と「寛大」について話し合ってみてはどうでしょう。

おお人の子よ！

汝繁栄の中にあるとも喜ぶな。汝またおちぶれるとも悲しむな。二つながら過ぎ去り、消え去るものなれば。 (かくされたる言葉のアラビア編 52)

おお人の子よ！

わが富をわが貧しき者に与えよ。されば汝天国にて、不滅の輝きの倉庫と不朽の栄光の宝庫より引き出し得ん。 ... (かくされたる言葉のアラビア編 57)

おお塵埃の子らよ！

富める者らに、貧しき者らの真夜中の嘆息を語れ。無思慮が彼らを破滅の道に導かざるため、また富の木より彼らを奪わざるために、施与と寛大はわが属性である。わが美德をもって自己を飾るものは幸いである。

(かくされたる言葉のペルシャ編 49)

おお激情の真髓よ！

すべての食欲を棄てて満ち足りることを求めよ。食欲なるものは常に奪われ、満足を知るものは常に愛され称賛されん。 (かくされたる言葉のペルシャ編 50)

人間はその時の状況に満足すべきです。いかなる生活習慣の虜になってもいけません。豪華な御馳走であろうと一切れのパンであろうと、同じように美味しく、楽しくいただくべきです。「足ることを知る」ことこそ人生の本当の財産なのです。自分の中に満足という美德を養えば自己の精神は自由になります。幸福は満足から生まれるものです。満足すれば富も貧困も同じです。 ...

(アブドル・バハ「大樹の泉」P36 二段落目)

クイズの答：<sup>こたえ</sup>1) サッカー 2) ポテトチップス 3) いいえ、パハオラが言われているから 4) <sup>あい</sup>愛、<sup>しんよう</sup>信用、<sup>どうじょう</sup>同情、<sup>しんせつ</sup>親切、<sup>きまえ</sup>気前よさ 5) はい 6) <sup>おとこ</sup>ホームレスの<sup>ひと</sup>男の人 7) <sup>ひ</sup>その日の<sup>ゆうしょく</sup>夕食さえもない<sup>きんじょ</sup>近所の<sup>かぞく</sup>家族に<sup>どうじょう</sup>同情したから 8) <sup>びとく</sup>美德を<sup>み</sup>身に<sup>つ</sup>付けた、<sup>ぬいぐるみ</sup>ぬいぐるみのうさぎ 9) <sup>きんぷん</sup>金粉を<sup>びとく</sup>ちりばめて<sup>か</sup>美德を<sup>こ</sup>書き<sup>こ</sup>込んだ<sup>ふ</sup>付せん 10) <sup>きまえ</sup>気前よさ、<sup>おも</sup>思いやり、<sup>しょうじき</sup>正直、<sup>だれ</sup>誰でも<sup>あい</sup>愛する<sup>きもち</sup>気持ち、...



No. 266  
2016年6月発行

以下のリンクにアクセスすると「ひるの星」をカラー印刷することができます。

<http://hirunohoshi.weebly.com/>

日本バハイ全国精神行政会

〒160-0022 東京都新宿区新宿 7丁目2番13号

電話：03-3209-7521 FAX：03-3204-0773

ひるの星委員会：グレン・ロウ、パウデンカービー真己、平原静志、平原ルアナ

物語：平原ルアナ

和訳：平原静志

ぬり絵：www.DotToDot.nets

写真：ウィキペディア、平原ルアナ、イヴァ・尊田、グレン・ロウ

さし絵：平本かおり、スティーヴ・パスカル、グレン・ロウ

テクニカルアドバイザー：グレン・ロウ

和訳の校正：岩倉 宣子

監修：野ロメアリー